

〔研究ノート〕

接頭辞「お～」と接尾辞「～さん」をともなう語彙の意味用法の記述

A Description of Meanings and Usage of the Words
in the "o~san" Form in Japanese

成 田 徹 男¹
NARITA, Tetsuo

要旨：

本稿では、「おぼうさん」「おてつだいさん」「おつかれさん」など、接頭辞「お～」および接尾辞「～さん」の両者をともなう、現代日本語の一群の語彙について、その意味用法を整理し、形態的なバリエーションの偏りなどを考察した。その結果、「固有名詞」の「人名」については、形態の変異が豊富であるのに対し、「固有名詞」の「神仏」については変異がとばしくかなり一語化している、「親族呼称・親族関係」については「親族 類」は形態の変異がかなりあるのに対して「親族 類」は変異がとばしくかなり一語化している、「職業・地位・性質」についてはかなり一語化している、「擬人化など」については、「おつきさま」「おつかれさま」のようにかなりかなり一語化しているものと、「おにんぎょうさん」のように、形態的変異があるものとがある、というように整理できた。

() 本稿での分類と代表的な語彙と一語化の傾向

<分類>

<一語化の傾向>

固有名詞

人名 「おとらさん」

一語化していない

神仏 「おいせさん」

かなり一語化している

親族呼称・親族関係

親族 類 「おかあさん」

あまり一語化していない

親族 類 「おじょう【嬢】さん」

かなり一語化している

職業・地位・性質 「おまわりさん」

かなり一語化している

擬人化など 「おつきさま」

一語化しているものがある

キーワード：接頭辞「お～」、接尾辞「～さん」、敬語、呼びかけ、一語化

1. 名古屋市立大学大学院 人間文化研究科 教授

1. はじめに

現代日本語には、「おぼうさん」「おてつだいさん」「おつかれさん」など、接頭辞「お～」および接尾辞「～さん」の両者をともなう語がかなりある。菊地（1994、1997）および菊地（1996）、菊地（2010）には、名詞類で二人称・三人称の人物の呼び方（尊敬語ないしある程度以上敬意を含むもの）、一人称の人物の呼び方（謙譲語に限らず、ある程度へりくだり／かしこまり／改まりの意を含むものを中心に）、美化語の語例が整理されて示されているが、そこから、接頭辞「お～／ご～」および接尾辞「～さま／～さん」の両者をともなうもの、ともなうであろうと思われるものをひろいあげてみると、以下に示すようになる。＜ ＞に入れられているものは、分類項目とは別のところで言及されているものと、接尾辞がついていない語形で示されているが、接尾辞がついた語形があると成田が判断したものとである。また、漢語であると思われる場合は、漢字表記を【 】に入れて示すようにした。なお、以下の記述の中では、一部の和語について漢字表記を（ ）に入れて示した。

（1） 菊地のあげている語彙

敬意を含むもの

代名詞類 「おたく【宅】さま」「ごほんにん【本人】さま」

職名・身分 「おかあさま」＜おとうさん＞＜およめさん＞＜おしゅうとさん＞「おきゃく【客】さま」「ごきんじょ【近所】さま」＜ごしゅじん【主人】さま＞

へりくだり等の意を含むもの

なし

美化語

ほぼ一語になっているもの 「おいしゃ【医者】さん」「おいせさん」「おかげさま」「おじさん」「おじょう【嬢】さん」「おしらさま」「おつきさま」「おてつだいさん」「おてんと【天道】さま」「おとくい【得意】さま」「おとなりさん」「おにしさん」「おばさん」「おひさま」「おひがしさま」「おひとりさま」「おふたりさま」「おまわりさん」

その他 「おあいにくさま」「おかみさん」＜おしゃか【釈迦】さま＞＜おじゃま【邪魔】さま＞＜おそまつ【粗末】さま＞「おたがいさま」「おつかれさま」＜おてらさん＞＜おてんばさん＞＜おのぼりさん＞＜おまえさん＞＜ごきげん【機嫌】さん＞「ごくろう【苦労】さま」＜ごちそう【馳走】さま＞

「ほぼ一語になっているもの」は、基本的に、接頭辞「お～」および接尾辞「～さん」の両者をともなった語形でつかわれるものである。つまり、形態の変異にとぼしいのである。美化語に

はそのようなものがかなりある。一方、「おかあさま」のような語は、「おかあさん」「かあさん」「かあちゃん」のように形態の変異がみられる。本稿では、このような形態をもつ語群をひとまとまりのものとみなして、語例をもっとふやし、形態の変異に着目して、全体の分類・整理をこころみた。

2. 接頭辞「お～」と接尾辞「～さん」

2.1. 接頭辞「お～」

接頭辞「お～」については、一般的には敬語の一部として考察されてきた。接頭辞「お～」のつく語は、2007（平成19）年2月2日の文化審議会答申『敬語の指針』に示された敬語の5分類では、尊敬語・謙譲語・美化語のいずれかである。たとえば、「お手紙」は、たてるべき人に属するもの（つまり、たとえばその人が書いたもの）であれば尊敬語であり、たてるべき人を相手とするもの（つまり、たとえばその人にあてて話し手が書いたもの）であれば謙譲語である。「お塩」「お魚」などは、特にたてる人と関係なく広くつかわれ、美化語とされる。美化語は、上品語といってもよく、いわば話し手のたしなみである。

一般的には、接頭辞「ご～」は漢語につき、接頭辞「お～」は和語につく、というつかいわけがある。ただし、漢語で接頭辞「お～」が前接する例外は、かなり存在する。外来語には、原則として「お～」「ご～」のどちらもつかない。例外としては、「おビール」などがある。本稿では、接頭辞「お～」のつく語（したがって主として和語）を考察の対象とするけれども、接頭辞「ご～」のつく漢語も一部とりあげる。

和語については、基本的には接頭辞「お～」がつきうる、としておく。つきにくい、とはいえ、つかない、と断言する根拠はないのである。つきにくさをもたらず要因については、柴田（1957）菊地（1993、1997）などで形態面・意味用法面から考えられてきているが、それはあくまでつきにくい傾向を示すにとどまる。以下では、筆者の内省により、いえそうな語形をとりあげ、ふつういわない、あるいはいいにくいと思われる語形には、その前に「？」を、まずほとんどいわないであろうと思われる語形にはその前に「＊」をつけて示すことにする。

2.2. 接尾辞「～さん」

接尾辞の「～さん」は、おおよそ、人、ないし人あつかいをするものに後接し、軽い敬意をあらわす。「おうま（馬）さん」「おあげ（揚げ）さん」のように、人をあらわすのではない語ないし形態素に後接する場合は、擬人化していると考えておく。

現代日本語には、この両者が同時につかわれる「お～さん」という語形式の語彙が、かなり存在する。上述のように、接尾辞の「～さん」は、人、ないし人あつかいをするものに後接するため、「お～さん」という語形式の語彙は、必然的に、おおむね、人、ないし人あつかいをする語

となる。接頭辞「お～」は、広くいろいろな意味の語や形態素に前接するが、「お～さん」という語形式では、人、ないし人あつかいをする語ないし形態素に限られることとなり、原則としては尊敬語になりうるはずである。しかし、話し手自身についてはふつつかわず、「おにいちゃんについといで。」「おとうさんが説明したとおりだろう。」などにつかった場合も謙譲語とはいえない。これらは美化語とすべきであろう。

ここでは、「～さん」という、もっとも広くつかわれる形式を代表としているが、「～さま（様）」「～ちゃま」「～ちゃん」というような交替形がある。「～ちゃま」は、幼児語の音形態（いわゆる「チ音化」したかたち）で、一部の語彙を除いて、幼児の発話か、幼児語をまねしているか、揶揄する場合にかぎられる。それ以外の形態についておおざっぱに言えば、「さま>さん>ちゃん>【なし=呼び捨て】」の四段階で、敬意がさがる。「～さま」は尊敬語としてつかわれることがおおい。「～ちゃん」は、親しみをこめた呼びかけ、愛称、子ども向けの発話（いわゆる「ベビートーク」）でつかわれる。

「～くん」は、典型的には男性を対象とする、「～さん」ないし「～ちゃん」とのつかいわけがあると思われる接尾辞である。しかし、「お～」といっしょに「お～くん」という語形式でつかわれるのは、まれであろうと考えられる。魚類にクワイ「さかなくん」を幼児が「おさかなくん」ということはあるかもしれない。人名の場合、「つねさま」「つねくん」「つねちゃん」があり、「おつねさま」「おつねちゃん」をつかっても、「？おつねくん」はつかいそうもない。親族名称の場合、「にいさん」「おにいさん」はあるが、「？おにいくん」とはいわない。若い力士であっても「おすもうさん」であって、「？おすもうくん」とはいわない。なお、「おかわりくん」は、ごはんをおかわりする「おかわり」を愛称としたものである。

また、「おはなはん」の「～はん」、「坂本どん」というような「～どん」などの方言的な変異形や、「たっちん」というような「～ちん」、「おてもやん」「ばたやん」の「～やん」などの、口語的な変異形は、おそらくかなりたくさんあるが、ここでは対象としない。

3. 固有名詞

3.1. 人 名

人名に接頭辞「お～」がつく場合、その人名は多くの場合2拍分の長さになる。たとえば「よしこ」から「およし」、「きみよ」から「おきみ」のようになる。圧倒的に女性の場合がおおい。苗字はあまりつかわれず、ほとんどが、下の名前（given name）である。名前の前部分2拍分の前に「お～」をつけてつくられるのである。ただし、「おすぎ」のように、男性の苗字「すぎうら」がもとになったものもある。この場合、「おすぎ」という愛称が女性的という属性をあらわすために選択されている、とみるべきであろう。

のちに浮世草子や浄瑠璃の題材となった事件の「おさん茂兵衛」の「おさん」、「八百屋お七」

の「おしち」、『仮名手本忠臣蔵』の「お軽勘平」の「おかる」、『世情浮名横櫛（よはなさけうきな）のよこぐし』の「おとみ（さん）」、吉川英治『宮本武蔵』の「おつう【通】」、木下順二『夕鶴』（「鶴の恩返し」）の「おつう」など、文学作品に登場するよく知られた女性名がある。

人名に接尾辞「～さん」がつく場合は、フルネームにももちろんつく。ただ、愛称では、しばしばその人名が2拍分の長さになる。たとえば「とらじろう」から「とらさん」、「かずよし」から「かずさん」のようになる。2拍の後の拍が無声子音であるサ行子音に狭母音がついたものと促音化して、「やすし」から「やっさん」、さらにタ行子音に狭母音がついたものでは音変化して「たつお」から「たっつあん」のようになることもある。接頭辞「お～」がついていない形では、男性の場合がおおいと思われる。思いつくものは下の名前（given name）がおおいが、「やまざき」から「やまさん」、「やすうら」から「やっさん」のように、苗字の場合もかなりありそうである。「～さん」がつく2拍分の長さの部分は、名前にしろ苗字にしろ前部分2拍をとる場合がおおいけれども、「よしずみ」から「ずみさん」、「たぶち」から「ぶちさん」、「やまぐち」から「ぐっさん」、「かじく（加治工）」から「じくさん」のような後ろ部分2拍をとることもある。

上記の例からも推測できるように、「お～さん」の間にはいるのが人名だと、一般的には女性ととらえられる。歌手の加藤登紀子の愛称は「おときさん」であるし、山田洋次の「男はつらいよ」シリーズの主人公「フーテンの寅」こと車寅次郎が「とらさん」であるのに対し、西川辰美の4コマ漫画（後に柳家金五楼主演でテレビドラマ化・映画化）の主人公の「女中」は「おとらさん」である。「くまさん」は、動物の熊か、長屋に住む男性「くまさんはっつあん（熊さん八っつあん）」の「くまさん」だが、「おくまさん」というと「おくまばあさん」という感じがする。「とんねるず」の石橋貴明の愛称は「たかさん」だが、「おたかさん」は元社会党委員長土井たか子とか、「11PM」で藤本義一と司会をした女性とかが思い浮かぶ。少女のころ「おしん」（テレビドラマ『おしん』の主人公「田倉（たのくら）しん」と呼ばれた女性が大人になって「おしんさん」と呼ばれても不思議はないが、「しんさん」では、テレビの時代劇『暴れん坊将軍』のお忍びのときの「徳田新之助」の愛称となってしまう。

もちろん、「さき」という名前の女性が「さきさん」と呼ばれてもよいので、「お～」がついていない場合は男女どちらもある。また、俳優藤村俊二の愛称は「おひょいさん」で、「お～さん」が男性につかわれることもないわけではない。

なお、人名については語種の判定が困難な例もおおく、語種を判別する必要性もとぼしいと考えられる。「お～」「お～さん」という語形では、和語がふつうではあるものの、たとえばひらがなで「しん」とかかれる名前が、和語か漢語かははっきりしないし、「ゆうこ」の「ゆう」は「裕」「優」「悠」などなら漢語要素、「夕」なら和語要素であるけれども、どちらの場合でも「おゆう」「おゆうさん」となりうるので、語種が判断基準となりにくい。

3.2 . 神 仏

「かみ」は「かみさま」、「ほとけ」は「みほとけ」「ほとけさま」「みほとけさま」となるが、「？おかみさま」とはいわず、「おかみさん」は別語であるし、「？おほとけさん」ともいわない。「みほとけさま」という。七福神は庶民に親しまれている神様であり、「だいこく【大黒】さま」「えびすさん」「べんてん【弁天】さま」などと呼ばれるけれども、「？おだいこくさま」「？おえびすさま」「？おべんてんさま」といわないし、漢語だから「ご～」がつくかというところ「？ごだいこくさま」「？ごべんてんさま」ともいわない。名古屋では熱田神宮を「あつたさん」ないし「あつたさん」と呼ぶが、「？おあつたさん」とはいわない。

その一方で、「おいせさん」「おいなりさん」「おしよろ【精霊】さま」「おしら【精霊】さま」「おだいし【大師】さま」「おにしさま」（西本願寺）「おひがしさま」（東本願寺）「おふどう【不動】さん」などは広くつかわれる。尾張地方では「千代保稲荷」を「おちょぼさん」という。これらはまつられている神仏などをさす場合と、そのまつられている場所、あるいは神社などの組織をさす場合とがある。「おしよろ【精霊】さま」は主として前者、「おいせさん」は主として後者、「おいなりさん」「おふどうさん」「おだいしさま」「おちょぼさん」は両者ということになるが、ときにはその区別もあいまいである。

「おしよろ【精霊】さま」は特定のものとはいいいくいが、「おいせさん」「おちょぼさん」は特定のものである。「おだいしさま」「おふどうさん」は複数の対象につかわれるが、ふつうそれぞれの地域でさすものはひとつに特定されるであろう。「おいなりさん」は、「隣横丁のお稲荷さんへ」というように、どここのまちにもひとつぐらいはあるという意味では、普通名詞に近いかもしれない。しかし、やはり、それぞれの地域でさすものはひとつ、あるいはかなり少数に限定されるだろう。その意味で、ここでは「固有名詞」の一部に位置付けておきたい。

また、「おだいし【大師】さま」は、弘法大師その人をさす固有名詞でもあり、「おしゃか【釈迦】さま」も釈迦その人をさす固有名詞、つまり人名でもある。上記の分類項目「人名」にも属す、としてもよい。ただし、「だいしさま」とはいえても、「？おだいし」「？しゃかさま」とはあまりいいそうもないし、「おしゃか」（「おしゃかになる」）は別の意味の語となる。まして、おおくの人名ではありうる「～ちゃん」という語形式、「？おだいしちゃん」「？おしゃかちゃん」は、ふつう考えられない形である。もっとも、最近の「ゆるキャラ」ブームで、どこかで「？おだいしちゃん」「？おしゃかちゃん」のキャラクターがつくられないともかぎらないが。これらは、ふつうは接頭辞「お～」も接尾辞「～さん」も、はぶくことができない。つまり、全体で一語のようにになっている。

「おいせさん」「おいなりさん」「おふどうさん」「おしよろさま」も、「？おいせ」「？おふどう」「？おしよろ」「？いせさん」「？いなりさん」「？ふどうさん」「？しよろさま」、さらには「？おいせちゃん」「？おしよろちゃん」「？おいなりちゃん」「？おふどうちゃん」とはいわない

であろう。「おいなり」は、「いなりずし」の意味でしかいわないように思うが、どうであろうか。

つまり、この「神仏」に分類した語彙は、形態的なパリエーションが少なく、一語化している。信仰、尊敬の対象であることと、関連する性質であろう。

4. 親族呼称・親族関係についての語など

広い意味でのいわゆる親族名称には、いろいろな語がふくまれる。ここでは、話し手本人との親族関係を示し、その親族関係の人物に対する「呼びかけ」としてももちいるような場合を「親族呼称」、ある人物について、話し手本人以外の人物との親族関係を示す語であらわす場合を「親族関係」とする。

ここでとりあげる語には、家庭内で「親族呼称」としてつかうこともでき、話し手本人以外の「親族関係」としてもつかうことができるものと、基本的に話し手本人以外の「親族関係」としてしかつかえないものがある。前者を「親族 類」、後者を「親族 類」とよぶことにする。前者の「親族 類」には、「おとうさん」「おかあさん」「おばあさん」「おじいさん」「おにいさん」「おねえさん」などがある。後者の「親族 類」には、「おぼっ【坊】ちゃん」「おじょう【嬢】さん」「おこさん」「おまごさん」などがある。人によっては「ごしんせき【親戚】さま」「ごしんるい【親類】さま」もつかう。「親族 類」は、規範的とされる敬語のつかいかたでは、他人に話すときは「ちち」「はは」「そぼ【祖母】」「そふ【祖父】」「あに」「あね」という謙譲語をつかうべきものとされる。逆に、「親族 類」は、家庭内で親族をよぶときや、家庭内の親族をさす場合にはふつうつかわない。「おぼっちゃん、どこ？」とか、「おこさんたちは勉強しているかな」とかいう用法が、ふざけているとか皮肉っぽいとか解釈されるのはそのせいである。ただ、テレビタレントが、トーク番組で自分の母親を「おかあさん」、ときに父親を「おとうさん」と表現するのは、いまではありふれたことになってきており、このような区別はあいまいになってきているようである。

「親族 類」は、話し手本人以外の「親族関係」として、「 さんのおかあさん」「 さんち(家)のおじいさん」のようにつかえ、「 さんの～」「 さんち(家)の～」という限定があれば「呼びかけ」にもつかえる。さらに、よく知られているように、「 さんの～」「 さんち(家)の～」という限定なしの単独の形で、家族以外の人物への「呼びかけ」にもつかわれる。話し手の家族の最年少構成員の視点からみて該当する年齢ぐらいの他人について、「おばあさん」「おじいさん」「おにいさん」「おにいちゃん」「にいちゃん」「おねえさん」「おねえちゃん」「ねえちゃん」という。接頭辞「お～」としてよいかどうか判断がつかないが、語源的には接頭辞「お～」がついて一語化したものとして、「おばさん」「おじさん」もある。近年は、「おばさん」「おじさん」の評判がわるいせいか、そのかわりに「おかあさん」「おとうさん」もつかわれるようになっている。

「親族 類」については、「おとうさま - おとうさん - おとうちゃん」と「さま > さん > ちゃん」の3段階の形態がそろっている。接尾辞「～ちゃま」も幼児語としてはありうる。接頭辞「お～」をはぶいた場合は、「？とうさま」「？かあさま」には違和感があるかもしれないが、「とうさん - とうちゃん」「かあさん - かあちゃん」のようにいえる。また、「おとう」「おかん」「おばあ」「おじい」のような形態、さらに促音のはいる「おっとう」「おっかあ」のような形態もつかわれよう。

「親族 類」については、形態の変異はかなり限定される。「おじょうさま」「おこさま」「おまごさま」はあっても、「？おぼっさま」はない（「おぼうさま」は4. でとりあげる職業としての僧侶となる）。「おぼっちゃん」「おじょうちゃん」はふつうだが、「？おこちゃん」「？おまごちゃん」はあまり一般的ではない。接頭辞「お～」をはぶいた場合は、「ぼっちゃん」はいえるが、「？じょうさん」「？こさん」「？まごさん」「？じょうちゃん」「？こちゃん」「？まごちゃん」とはいえない。接尾辞「～さん」などをはぶいた「？おぼう」「？おじょう」「？おまご」はあまりつかわれそうにない。「おこ」は「あの方にはお子がおありだ。」のようにつかえそうである。なお、美空ひばりの愛称は「お嬢」であった。話し手以外の人物に関係づけられるため、つまりその子の親などに配慮するため、「お～」「～さん」をつけた形態がうみだされたのであろう。

「親族 類」でやや特殊なものとしては、「おははうえさま」「おちちうえさま」のような語がある。現在は日常でほとんどつかわれないであろうが、時代劇で武家の子弟がつかうのなら自然である。「～うえ（上）」がついているので尊敬語としてしかつかわず、「＊おちちうえさん - ＊おちちうえちゃん」という変異形はない。接頭辞「お～」をはぶいた場合も、「ちちうえさま」「ははうえさま」はいえるが、「＊ちちうえさん - ＊ちちうえちゃん」「＊ははうえさん - ＊ははうえちゃん」はない。森進一の歌にもある「おふくろさん」は、ふつう「？おふくろさま - ＊おふくろちゃん」のような語形はつかわず、「おふくろ」となるとたいていは話し手自身の母親のことで謙讓語的になる。対になる「おやじさん」「おやじ」は「お」が接頭辞かどうかよくわからない。形態的な変異がすくないことは「おふくろさん」と共通している。「親族 類」で個別にふれておきたいものに「およめさん」「おむこさん」がある。「およめさん」は、一般的には誰かの妻をさし、「さんのおよめさん」のようにつかうことができる。家制度が意識されて「家のおよめさん」「さんち（家）のおよめさん」というように、跡取り息子の配偶者をさすこともある。また、結婚式における花嫁の意味でよくつかわれる。「よめさん」となると話し手が自分の配偶者をさす場合もある。接尾辞「～さん」がついているので謙讓語的とはいいいくいが、「うちのよめさんがうるさくて。」などとつかうことができる。さらに、「およめ」という語形で「～におよめに行く」のようにつかえる。この場合は「よめに行く」全体に接頭辞「お～」がついている、とみなすべきかもしれない。「おむこさん」は、似てはいるが用法の幅はややせまく、「？～におむこに行く」はあまりつかわれないであろう。

5. 職業・地位・性質

警官・巡査のことを「おまわりさん」、力士・相撲取りのことを「おすもうさん」という。そのほか、「おさむらいさん」「おぶけ【武家】さま」「おとのさま」「おひめさま」「おぶぎょう【奉行】さま」「おやくにん【役人】さま」「おくげ【公家】さん」「おひやくしょう【百姓】さん」「おいしゃ【医者】さん」「おぼう【坊】さん」「おてら（寺）さん」「おきやく【客】さま」「おとくい【得意】さん」「ごひいき【鼻屑】さま」「ごらいひん【来賓】さま」などのように、ある職業・地位にある人、あるいは人々を意味する語群がある。「おぼう【坊】さん」「おてら（寺）さん」は、場所・施設をあらわす「坊」「寺」が転用されたものである。「おぼう【坊】さん」は場所をあらわすことはなくなっているが、「おてら（寺）さん」は、「このあたりに、おてらさんがありませんか。」というように場所・施設をあらわす名詞としてつかうことがある。

この語群は、形態的変異が比較的すくない。「おまわり」は、接頭辞「お～」がついていないが、見下したいいかたとなる。「おすもう」は相撲そのものであって、人をあらわさない。「おさむらい」「おぶぎょう」「おやくにん」などはつかわれるが、「？おとの」「？おひめ」「？おぼう」とはいわない。「おてら」は場所・施設であって、人ではない。接頭辞「お～」をはぶくと、「とのさま」「ひめさま」「ぶぎょうさま」「ぼうさん」はつかわれそうであるが、「？まわりさん」「？すもうさん」「？さむらいさん」「？ぶけさま」「？やくにんさま」「？くげさん」「？ひやくしょうさん」「？いしゃさん」「？てらさん」「？きやくさま」「？とくいさん」はあまりふつうではない。また、接尾辞については、ある程度固定化しているものがおおい。「おきやくさま」「おとくいさん」は、「おきやくさん」「おとくいさま」ともいえるが、「？おまわりさま」「？おすもうさま」とはいわず、「？ひめさん」ともいわない。つまり、接頭辞や接尾辞がついた形で一語化している傾向があるのである。

また、ある仕事をする人、あるいは人々、さらにそのあきないをする店舗をも意味する語群がある。「おさかなやさん」「おこめやさん」「おにくやさん」「おはなやさん」「おちゃ【茶】やさん」「おくすりやさん」「おかし【菓子】やさん」「おすしやさん」「おそばやさん」「おうどんやさん」「おべんとう【弁当】やさん」「おひっこしやさん」「おふろ【風呂】やさん」など、「～や（屋）」という接尾辞をふくむ語形の語群である。

この語群は、「おさかな」「おこめ」のように、そもそも名詞に接頭辞「お～」をつけてつかうことがおおい語と関連しているので、形態的にかなり自由である。たとえば「そば」については、ものをあらわす「おそば」はもちろん、人をあらわすとき「そばや」「おそばや」「そばやさん」の、どの形でもつかえる。ただ、接尾辞はふつう「～さん」だけで、「？おそばやさま」「？おそばやちゃん」などの変異はない。

さらに、「おてんばさん」「おませさん」「おしゃまさん」「おすましさん」「おねむさん」「おあきさん」（幼稚園などで通園バスに乗らず徒歩でかよう子どものグループ）「おのぼりさん」

「おなじみさん」などの語群がある。これらは、「おてんば」「おませ」「おしゃま」「おすまし」「おねむ」「おあるき」「おのぼり」「おなじみ」が、ある状態をあらわして、それに接尾辞「～さん」がついた形であるとかんがえられる。したがって、接頭辞「お～」をはぶくことはできない。また、「～さま」「～ちゃん」という接尾辞もつかわない。

これらと似たものとして「おえらいさん」「おばかさん」「おてんき【天気】やさん」（「～や（屋）」という接尾辞をふくむ語形）という語もあるが、「おえらい」「おばか」「おてんきや」が状態をあらわすとみなせなくもない。

また、「おとなりさん」「おむかいさん」（接頭辞「ご～」がつく漢語で「ごきんじょ【近所】さん」という語もある）「おひとりさま」「おふたりさま」「おさんにん【三人】さま」（4人からは、ふつう「よんめい【四名】さま」「ごめい【五名】さま」のようになる）という語もある。

「おたく【宅】さま」は、家をあらわす「宅」から転じたものなので、ここでふれておく。「たく」という語形では「たくの主人は～ですの。」のような一人称の身内（男性配偶者）をさす用法があるが、「おたく」は二人称代名詞になる。「おたく【宅】さま」は二人称の尊敬語である。さらに「（俗に）趣味などに病的に凝って、ひとり楽しんでいる若者（三省堂『新明解国語辞典第七版』による）」をあらわす「オタク」は普通名詞になる。

6. 擬人化など

そのほかに、数はさほどおおくないが、人以外で「お～さん」という語形式をもつものについてふれておく。

自然物として、「おひさま」「おつきさま」「おほしさま」「おてんと【天道】さま」がある。いずれも一語化していて、形態的な変異がすくない。自然に対する尊敬崇拜の念、ということをはかんがえると、「神仏」に近いかもしれない。なお、「かみなりさま」とはいうが、「？おかみなりさま」とはいわない。これらは、かなり一語化していて、形態的な変異がすくない。

「もの」ではあるが、人のかたちをとるものとして、「おにんぎょう【人形】さん」「おひなさま」「おだいら【内裏】さま」「おじぞう【地蔵】さん」がある。動物では「おさるさん」「おうま（馬）さん」「おさかなさん」「おかいこ（蚕）さん」がある。時代や地域や人によっては「おきつねさま」「おいぬさま」もありうる。植物では、「花」について（主として幼児語としてであろうが）「おはなさん」はいいそうである。それ以外の「もの」としては、絵本の『おさじ（匙）さん』とか、童謡にある「こちこちかっちゃん、おとけい（時計）さん」のような例や、「おいもさん」「おまめさん」「おからさん」「おあげ（揚げ）さん」「おいなりさん」（稻荷寿司）「おねぎさん」、筆者が聞いた例としては「おにくさん」もある。いずれも幼児語に類するものである。これらはもともと単独で名詞としてつかわれるもので、接頭辞「お～」のないかたちや、接尾辞「～さん」のないかたちでもつかわれるものがおおい。

そして、もうひとつ、あいさつや慣用句の類がある。「おあいにくさま」「おかげさま(で)」「おせわ【世話】さま」「おじゃま【邪魔】さま」「おたがいさま」「おつかれさま」「おはようさん」といったものである。接頭辞「ご～」がつく漢語では、「ごちそう【馳走】さま」「ごくろう【苦勞】さま」「ごしゅうしょう【愁傷】さま」といった語もある。人によっては「ごめいわく【迷惑】さま」などもつかいそうである。かなり形態が固定化しているといつてよいであろう。

7. ま と め

以上述べてきた語形の変異のあり方について、傾向をまとめるとおおよそ次のようになる。「固有名詞」の「人名」については、形態の変異が豊富であるのに対し、「固有名詞」の「神仏」については変異がとばしくかなり一語化している、「親族呼称・親族関係」については「親族類」は形態の変異がかなりあるのに対して「親族類」は変異がとばしくかなり一語化している、「職業・地位・性質」についてはかなり一語化している、「擬人化など」については、「おつきさま」「おつかれさま」のようにかなりかなり一語化しているものと、「おにんぎょうさん」のように、形態的変異があるものがある。

(2) 本稿での分類と代表的な語彙と一語化の傾向

<分類>

固有名詞

人名 「おとらさん」

神仏 「おいせさん」

親族呼称・親族関係

親族類 「おかあさん」

親族類 「おじょう【嬢】さん」

職業・地位・性質 「おまわりさん」

擬人化など 「おつきさま」

<一語化の傾向>

一語化していない

かなり一語化している

あまり一語化していない

かなり一語化している

かなり一語化している

一語化しているものがある

接尾辞「～さん」は、人や団体・組織をあらわす名詞のあとにつけて、かるい敬意をあらわすことができ、便利なものである。接頭辞「お～」は、いろいろな語のまえにつけて、話し手の上品さをあらわすことができる。この両者をともなうものは、その両方の意味をかねそなえているわけであるが、そこから派生して一語化、固定化した語彙がかなりの数にのぼるのである。敬語に関係する語彙については、このような分類・整理をすすめることで、日本語習得、日本語指導に役立てることができるのではないかと思う。

(2013年4月9日)

【参考文献】

2007（平成19）年2月2日の文化審議会答申『敬語の指針』

菊地康人[きくち・やすと](1994) 『敬語』 角川書店

菊地康人[きくち・やすと](1997) 『敬語』 講談社学術文庫

菊地康人[きくち・やすと](1996) 『敬語再入門』 丸善ライブラリー

菊地康人[きくち・やすと](2010) 『敬語再入門』 講談社学術文庫

柴田 武[しばた・たけし](1957) 「お」の付く語・付かない語 『言語生活』

1957年7月号